

正課剣道における指導法の研究(2)

——高校生を対象——

恵土 孝吉・渡辺 香*・三苫 保久**

A Study on the Teaching Method of Kendo in Physical Education Class(2) In Case of High-School Student

Kokichi EDO, Kaoru WATANABE and Yasuhisa MITOMA

はじめに

中学校、高等学校における正課剣道の指導は非常に難しいといわれる。その大きな原因はア) 小学校や中学校において剣道の学習経験が無い事。あってもごく僅かである事。イ) 指導者の教材に対する研究不足。ウ) 配当時間の不足等が挙げられる。従って、現場の先生のみならず、多くの剣道研究者らによって正課剣道の効率的、能率的指導法、言葉を変えて言えば、生徒が好んで取り組む授業、運動の量や強度が確保出来る授業等の工夫、研究がなされてきた^{1~8,12)}。しかし、大方の先生、生徒が満足する指導法は十分開示されていないのが現状と考えられる。我々は先に⁶⁾中学校における正課剣道の指導を効率的、能率的に行うには、「学習内容の精選とその配置並びに指導手順」が必要かつ重要と考え一つの試案を示した。更に我々は⁷⁾上述の試案に対して大学生を対象に追試を行いその効果を検討した。

本研究は先に二回にわたって示した試案や検討したものを基に^{1~8,12)}、高校生向けの指導案を作成するとともに実際の授業を行い、指導案の学習内容(技術項目、配分時間等)や指導手順を検討してみた。

1 研究方法

1 指導者・非指導者

指導者は、本研究に理解を示した県立高校の

男子体育教師である。剣道歴は、小学校3年から剣道を始め高校、大学においても課外クラブに所属し熱心に剣道を修め、なおかつ現在も週3~4回、約1時間の剣道練習を行っている剣道4段、教職歴2年の先生である。非指導者は、理解を示した先生との関係から同校の高校生一学級30名(男17名、女13名)を対象とした。このうち、8名は小学校、中学校を通して剣道の経験を多少有していた。

2 指導計画・指導案

高校1年生における指導計画案を表1のように考案し、それを基に毎時の指導案を作成した。ここでは毎時の具体的指導案の一部を表2、3、4、に示した。

3 評価者

次ぎの理由から、二つの群(A群、B群)とした。それは、資料となる指導案とビデオフィルムが大量であるため多くの評価者が評価するには、経済的、時間的、場所的に非常に困難が伴う。したがって大量の資料を詳細に検討する群として、比較的小さいしやさい地元の3名の先生(高校、大学で剣道を正課で教えている剣道4段から7段の剣道専門教員)をA群評価者とした。一方では、出来る限り多くの剣道専門家に評価していただく必要から平成6年9月2、3日、日本体育大学で行われた日本武道学会に参加した先生約20名(大学で剣道を正課で教えている剣道6段から7段の剣道専門教員)

*中部大学

**米原高校

表1 高校1年生における剣道指導計画

(50分授業・20時限 男女共習)

時間	時限	第1限目	第2限目	第3限目	第4・5限目	第6限目	第7・8限目
授業開始		・準備運動	・準備運動	・準備運動	・防具着用 (胴・垂)	・防具着用 (胴・垂)	・防具着用 (胴・垂)
↓		・剣道について	・礼法 (立礼、座礼 立ち方、座り 方)	・礼法	・準備運動	・準備運動	・準備運動
10分			・送り足 (すり足)	・防具の着け 方(胴・垂)	・素振り	・素振り	・素振り
↓		・練習態度			・礼	・そんきょ胴 打ち	・そんきょ胴 打ち
20分			・竹刀の抜き 方、納め方	・上下素振り	・踏み込み足 と送り足	・礼	・着面
↓		・VTRを見る (高校生の剣道)	・中段の構え	・正面素振り	・正面打ち (空間)	・防具の着け 方(面)	・基本打突 (正面打ち)
30分		(大学生の剣道)	・上下素振り	・斜め素振り	・小手打ち (空間)		(小手打ち)
↓		(トップレベル の剣道)		・踏み込み足	・小手打ち (空間)	・着面して基 本打突	(胴打ち)
40分		・竹刀等に記 名する	・正面素振り	・防具のしまい 方	・正面打ち (竹刀)※	(正面打ち)	・連続技 (小手一面)
↓		・整理運動	・整理運動	・整理運動	・小手打ち (竹刀)※	(小手打ち)	・打込み (既習技を用 いて)
終了					・胴打ち (胴)	・脱面 礼	・脱面 礼
					・防具片づけ	・防具片づけ	・防具片づけ
					・整理運動	・整理運動	・整理運動

時間	時限	第9・10・11限目	第12限目	第13・14・15・16限目	第17・18限目	第19・20限目	
授業開始		・防具着用 (胴・垂)	・防具着用 (胴・垂)	・防具着用 (胴・垂)	・防具着用 (胴・垂)	・防具着用 (胴・垂)	※竹刀を補助 棒代りにもち いる。
↓		・準備運動	・準備運動	・準備運動	・準備運動	・準備運動	
10分		・素振り	・素振り	・素振り	・素振り	・素振り	
↓		・そんきょ胴 打ち	・そんきょ胴 打ち	・礼	・礼	・礼	
20分		・礼	・礼	・着面	・着面	・着面	
↓		・基本打突	・基本打突		・試合運営法	・テスト	
30分		・防御の練習 引き技 (面打ち) (小手打ち) (胴打ち)	・互角練習 (既習技を用 いて)	・基本打突 互角練習 (既習技を用 いて)	・試合		
↓			・脱面		・審判法		
40分		・互角練習	・ルールを学 ぶ	・ルールを学 ぶ		・アンケート	
↓		・打ち込み	(審判法など を学ぶ)	(審判法など を学ぶ)			
終了		・脱面 礼	・脱面 礼	・脱面 礼	・防具片づけ	・防具片づけ	
		・防具片づけ	・防具片づけ	・防具片づけ	・防具片づけ	・防具片づけ	
		・整理運動	・整理運動	・整理運動	・整理運動	・整理運動	

表2 高校1年生における剣道指導案

体 育 科 学 習 指 導 案		平成6年5月 日 曜日 限	
授業担当者 三 苦 保 久		指導クラス 1年12組(男17名 女13名)	
領域・内容 武 道(剣 道)		第(4・5) 限	
本 時 の 指 導 目 標	剣道の初歩的動作で最も大切なのは、気剣体の一致した打ち込みである。 本時は分習法で行う。まず踏み込み足と送り足を学習させ、次に空間を打ち込ませ、最後に竹刀(補助棒)を打ち込むことを目標とした。		
本 時 の 学 習 内 容	礼法・送り足・素振りなど前時の復習・踏み込み足から送り足 正面打ち(空間)・正面打ち(竹刀)		
事前準備		用 具	
時間	学 習 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入	準備体操 礼法の復習	4列横隊でラジオ体操を行う。 正座をし、黙想、座礼を行う。	不足の場合には補う。 出欠をとる。
	送 り 足	竹刀の抜き方、中段の構えを復習する。 送り足の復習をする。 前後左右練習する。	「構え刀」と号令をかける。 全体に4歩下がり、中段の構えをとらせる。「前」「後」「右」「左」「前前」などと号令をかける。
	素 振 り	上下素振り 20本 正面素振り 20本	手と足がバラバラになりがちなので、ゆっくり大きく行わせる。
10分 展開 [1]	踏み込み足	踏み込み足の練習を以下の順序で行う。 ①自然に歩いて右足前で止まった姿勢をとらせる。 ②竹刀を腰に当て、前進後退をする。 ③右足前・左足後の自然体の構えから右足をその場から小さくあげ「トン」と踏み込む。その後左足をすかさず引きつけて、送り足をする。	全体に壁側に下がらせ、1列ずつ行わせる。 上体が前後にゆれないようにさせる。 右足踏み込み後、必ず上体を上の方に上げさせる。踏み込みとその後の左足の引きつけ、送り足を多く練習させる。
15分 展開 [2]	正 面 打 ち (空 間)	①～③までのおおむねできたら次に ④右諸手上段の構えをとる。 ⑤右足をその場で小さく上にあげる。 ⑥竹刀を振り下ろすと同時に右足を「トン」と踏み込み、その後送り足を行う。	上段からの正面打ちを示す 右足1本で立たせ、バランスをとらせると同時に右大腿部を上にあげさせる。
10分 展開 [3]	正 面 打 ち (竹 刀)	④～⑥の動作を3～4往復おこなう。 ④～⑥がおおむねできたら、1、3列は回れ右をして2、4列の人と向かい合う。 ⑦お互い中段に構え向かい合う。 ⑧受け手は1歩前に出て左にずれ、頭の高さに竹刀を横にする。 ⑨打ち手はその場で右諸手上段をとり右足をその場で小さく上にあげる。 ⑩打ち手は竹刀を振り下ろすと同時に右足を「トン」と踏み込み、受け手の竹刀を打つ。このとき打ち手は「メーン」とかけ声(気合い)をかける。 ⑪打った後左足をすかさず引きつけ送り足をする。	号令は「上段から、面を一打て」 受け手をつけさせて、実際に正面打ちの模範を示す。 竹刀の点検をさせる。 相手との距離は2m程度(すなわち近間で打たせる) 号令は「上段から、面を一打て」 受け手は面の打撃が加わったと同時に左手を放し、右手首を回転させる。 打ち手は面を打つときに、できる限り両肘を伸ばす。
15分		⑦～⑪までの動作を、受け手と打ち手交代で繰り返し行う。	剣道では面を打ったぞという意志表示が必要である。だから「メーン」というかけ声(気合い)をかける必要がある事を理解させる。
ま と め	本時の学習のまとめ 整理体操 整 黙 礼	何人かに正面打ちをやらせてもらう。 4列横隊に整列し、正座する。	
5分	後片づけ		

表3 高校1年生における剣道指導案

体 育 科 学 習 指 導 案		平成6年5月16日 月曜日 限	
授業担当者 三 苦 保 久		指導クラス 1年1・2組(男17名 女13名)	
領域・内容 武 道 (剣 道)		第 (7・8) 限	
本 時 の 指 導 目 標	剣道は両手に竹刀を持ち、右足前の前後開脚で前後左右の様々な方向へ、スムーズに時には瞬間的に移動し、動く相手や竹刀を様々な角度から打つ・突く・かわす身体運動である。その運動の中で、最も難関なのが、両手の竹刀操作と脚部の踏み込みの統合、即ち気剣体の一致である。本時は気剣体の一致した技を、実際防具を着けて学習させることを目標とした。		
本 時 の 学 習 内 容	右諸手上段からの面打ち(近間→一足一刀の間) 右諸手上段からの右胴打ち 中段からの面打ち 中段からの右胴打ち		
事前準備		用 具	
時間	学 習 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導入	防 具 着 用		正座をして防具を着けさせる。 防具の紐がほどけないようしっかり結ばせる。 呼吸法を指導する。 不足の場合補う。 アキレス腱をよく伸ばしておく。 発声、動作とも大きく行わせる。
	集 合 整 頓 挨拶 本時の説明 準備体操 素 振 り	4列横隊で整列し正座する。 座礼で挨拶する。 「気剣体の一致」について説明する。 当番を中心にラジオ体操第1を行う。 上下素振り20本 正面素振り20本 跳躍素振り20本 2人組で「そんきょ胴打ち」各20本 正座して面を着ける。	
10分	面 着 用		早く確実に着用させる。面紐をそろえて結ばせ見た目にも良くなるようにする。
展開 [1]	右諸手上段 から面打ち	4列横隊で1、3列が回れ右をして向かい合う。竹刀を点検する。 打ち手は右諸手上段の構えをとる。 「上段から面を打て」の号令の下に、打ち手は面を打ち、受け手は面を打たれる。 打つときに「メーン」と発声する。 5本打ったら、打ち手と受け手は交代する。 これを数回繰り返し、最後には号令なしで各自交代しながら練習する。	お互いに立礼をするよう指導する。 間合いには近間、一足一刀の間、遠間があることを復習する。 「上段から面を一打て」と号令を言う 元立ち(受け手)は「面を打て」と同時に剣先を右斜め下にさげ、面打撃の後すかさず右に体をさばくように指導する。これにより打ち手は面打撃の後真っ直ぐ体を送り足によって移動させることができる。 個別指導をしながら、適時集合をかけ、全体指導をする。 面打ちの際、雑巾を握る要領で竹刀の柄を握るように指導する。
5分			
展開 [2]	中段から面 打ち	おおむねできたら中段の構えをとり、近間に位置する。 「中段から面を打て」の号令と同時に「メーン」の発声で面を打つ。 5本交代で各自練習する。 集合して説明を聞き考える。	中段から大きく振りかぶって面打ちの、見本を示す。 面を打った後、上体を上の方にあげさせつつ左足を引きつけ送り足に入るよう指導する。 面を打った時、トンという音がするようにする。手首のスナップを利かせるようにする。 竹刀の刃部3分の1の部分で、相手の面部を打たないと有効打突にならないことを理解させる。なぜそう言うルールなのか考えさせる。
10分			
展開 [3]	胴 打 ち	胴打ちの説明を聞く。 その場で受け手は両手を挙げ胴にスキをつくる。 打ち手は右諸手上段から相手右胴部を打つ動作や竹刀の軌跡の確認をする。 「上段から胴を打て」の号令の下、「ドー」の発声と同時に踏み込み胴を打つ。 5本交代で胴打ちの練習をする。 数回繰り返し返す。	胴打ちの見本を示す。 手首の返しを理解させる。 刃筋が通るということ、木刀を使い、理解させる。 受け手は近間をとるように留意させる。 受け手は打たれる瞬間右側に体を回転させ、胴中央部を打たせるよう指導する。 打ち手は胴打ち時に、打突部位を見るように指導する。
10分	右諸手上段 から胴打ち		
ま と め	打ち込み練習	面打ちと胴打ちの練習を打ち込み練習の見本を見て実際におこなう。 近間で「ヤアー」の発声によって気の充実をはかり、拍子木の合図と同時に「メーン」「ドー」の発声で面、胴を打ち込む。拍子木の合図でやめる。 何人かに面打ち、胴打ちをやってもらう。	竹刀を点検させる。 打ち込み練習を示す。 腹から声を出すように指導する。 肩に力が入らないよう、丹田に力を入れるよう指導する。 面を打つ際、たたきつけないよう留意させる。 良い点、悪い点を指摘する。 出来るだけ良い点をほめるように心がける。
	本時の学習 のまとめ 整 列 整 頓 挨拶 後かたづけ	4列横隊に整列、正座する。 防具をはずし、防具を片づける。	定められた方法で防具を片づけさせる。
10分			

表4 高校1年生における剣道指導案

体 育 科 学 習 指 導 案		平成6年5月27日 月曜日 限		
授業担当者 三 苦 保 久		指導クラス 1年1・2組(男17名 女13名)		
領域・内容 武 道 (剣 道)		第 (1 2) 限		
本 時 の 指 導 目 標	剣道の試合は、有効打突を先に2本先取したものが勝利するものである。従って審判は、有効打突の判定を審判自身の目や耳で行う大変難しいものである。「充実した氣勢、適法な姿勢をもって自分の竹刀の打突部で相手の打突部位を正確に打ち残心あるもの」という正規の有効打突の条件のうち、おおきな氣勢で相手の打突部位をほぼ正確に打突したら1本と判定させることを目標とした。			
本 時 の 学 習 内 容	基本打ち 防御の練習 審判法 試合方法			
事前準備	ホワイトボード マジック		用 具 時計 審判旗 時計旗 紅白たすき	
時間	学 習 内 容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	
導入	防 具 着 用		正座をして防具を着けさせる。防具の紐がほどけないようしっかりと結ばせる。	
	集 合	4列横隊で整列し正座する。	呼吸法を指導する。	
	黙 想	座礼で挨拶する。		
	挨拶			
	準備体操	当番を中心にラジオ体操第1を行う。	不足の場合補う。 アキレス腱等をよく伸ばしておく。 発声、動作とも大きく行わせる。	
10分 展開 [1]	素 振 り	上下素振り20本 斜め素振り20本		
	胴 打 ち	2人組で「そんきょ胴打ち」各20本		
	面 着 用	正座して面を着ける。	早く確実に着用させる。	
	基本打ち	4列横隊で1、3列が回れ右をして向かい合う。 竹刀を点検する。	お互いに立礼をするよう指導する。	
		中段から大きく面打ち 5本×2 小さく面打ち 5本×2 小さく小手打ち 5本×2 胴打ち 5本×2 鐙競り合いから引き面 5本×2 引き胴 5本×2 引き小手 5本×2	気剣体一致を心掛けさせる。	
10分 展開 [2]	防御の練習	面打ちの防御 5本×2 小手打ちの防御 5本×2 胴打ちの防御 5本×2	すばやく引くように心掛けさせる。	
	互 角 練 習	互いに自由に打ち合い、防御して練習する。		
		互角練習 2分×5人		
	10分 展開 [3]	試合方法並びに審判方法	試合場が見える位置に4列横隊に整列正座し、面をとる。 1組が試合をする。試合前の礼法並びに所作の説明を聞く。 3人の審判による多数決で判定をすることを知る。 紅白の旗により、有効打突の判定の意志表示をすることを知る。 審判時のセリフも覚える。 掲示板の記入の仕方も学ぶ。 有効打突の基準を知る。 何人かに試合をしてもらい、有効打突の基準を理解する。	試合前の所作を説明する。 2人生徒を副審の位置に置く。 審判をしながら、適時説明を加える。 有効打突があれば、実際に旗をあげる。 副審にも、とりあえずあげてもらおう。 「始め」「止め」「面あり」「2本目」「小手あり」「勝負」「胴あり」「勝負あり」のセリフを言う。 ホワイトボードの前で説明する。 大きな声で打突部位を打突部で打っていれば、1本とする。有効打突の基準を即ち低いところにおいて判定させる。
	20分	黙 想 礼 後かたづけ		

をB群の評価者として選んだ。

4 検討資料と評価手順

A群の評価者は、毎時の指導案すべてに目を通すとともに、毎時の授業をその都度VHSのビデオフィルムに収録したものを再生し、鑑賞、評価した。

B群の評価者は、2、で示した毎時の指導案を基に（表2、3、4、をVHSのビデオフィルムに収録したもの）約10分間に短縮されたビデオフィルムを学会当日鑑賞し評価した。尚、事前に学会発表会場に、表1の剣道指導計画並びに表2、3、4、の指導案を配布した。

5 評価の観点

A群は、恵土⁹⁾にならって、感心できない授業として、ア)動作の説明や注意が多く、運動量の確保できない授業。イ)基本動作の学習に終始する授業。ウ)多種多様な技を教えすぎて消化不良となる授業。エ)その場での叩き合い・殴り合いの多い授業、の4項目。逆によい授業として、オ)運動の量や強度が確保できる授業。カ)剣道らしい動作で攻防動作ができ、愉快地に試合や審判ができる授業、の2項目とした。B群には、総括的、総論的に評価して頂いた。すなわち、10分間に要約したビデオフィルムの発表内容と剣道指導計画表並びに指導案に対して学会発表当日、鑑賞並びに読んで頂いた。

II 結果

B群の評価者は、約20名中2名から、ア)、10分間に要約したビデオフィルムの作成は本当に公平かつ恣意的な選択を行っていないのか。いわば授業の良いところだけをフィルムに収めたのではないか。イ)、指導者は本当に教職歴2年の先生なのか。ウ)、生徒の授業に対する評価はどうなのか。と言う疑義の発言があった。しかし、大方の評価者の評価は、“評価に値する指導法”であると評価し、3、4名の評価者からは事前に配布した剣道指導計画表と具体的指導案の要請があった。

一方、A群の評価者は初期（5、6時限まで）から中期（7、8、9、時限）までの指導、とりわけ初期は非常に能率的、効果的であると

評価したものの、後期（10～20時限目）における指導は学習時間に比較して極々普通程度の出来栄えと言う評価であった。

III 考察

B群の評価者は、毎時の指導案を時間的な余裕を持って目を通し評価したわけでも、また収録されたビデオフィルムのすべてに対して鑑賞したわけでもないが、総括的、総論的に“評価に値する指導法”として評価した。したがってこれらも考慮、参考としながら主にA群の評価について考察を行う。

特に初期の出来栄えがよかった理由として次ぎの2点が考えられる。まず1)素振り、切り返し、足捌き、教師の冗長な説明などを省いたこと。いわゆる基礎的動作といわれる内容を最小限におさえたことが挙げられる。すなわち、表1からも理解されるように基礎的動作は、その都度授業内容としてとりあげられているものの、授業時数全体の50%、学習する技7種類である。これを武道指定推進校¹⁰⁾の授業時数全体の86%、学習する技36種類と比較した場合、授業時数で約半分、技の種類では約5分の1である。武道指定推進校の授業時数や学習する技の種類が多いのは、正しい剣道の普及のためには「基本動作の習得に重点を置き、しっかりした基盤を作ってから応用動作へ移行して行く」¹¹⁾

¹¹⁾という指導者の指導理念が大きく影響しているものと考えられる。この考え方は学校剣道の指導法としてはいわば、オーソドックなものである。しかし、この指導法は生徒の側から言えば、同じ動作の繰り返して興味が半減すると共に、正確な動作の学習のために冗長な技の説明の繰り返しとその技の学習により消化不良となる要素を多く含み、言わばあまり感心できない授業と考えられる。本研究では、この点を解消するために、「しっかりした基盤を作ってから応用動作へ移行して行く」という指導法に反して「概ねの動作を習得させればよい」という考え方で指導計画をたて指導してみた。表2、3、4、から理解できるように基礎的動作を各時限に短時間ずつ配分する傍ら、剣道教育の中

核的内容である、打動作、すなわち面、小手、胴技を実際に補助棒を用いて早期より打せた。このような指導によって、あまり感心できない授業のア) 動作の説明や注意が多い授業、イ) 基本動作の学習に終始する授業、ウ) 多種多様な技を教えすぎで消化不良となる授業。の三点を解消できたものと考えられる。

次に2) 面、小手、胴打ちにおける指導を以下のように分習学習させたことが挙げられる。すなわち、ア) まず送り足の学習。イ) 踏み込み足の学習。ウ) 踏み込んだのち送り足の学習。エ) 次に右諸手上段の構えから面、小手、胴打ちの学習。打ったのち送り足の学習。オ) そして中段の構えで近間(180cm)に位置し、振りかぶって面、小手、胴打ちの学習をおこなったこと。この分習学習の特色は剣道動作で最も重要な動作である、気剣体の一致した動作(有効打突の条件)を学習させるために、ア) から順を追って(系統的に)指導したことである。

従来からの気剣体の一致した指導は、一般的に一足一刀の間(240cm)からの距離^{※2}を固守するとともに、打つ動作、踏み込む動作、そして体の捌きを一連の打撃動作として学習させている。いわば完成された打撃動作を要求し学習させている。このような指導は経験的に言えば上肢と下肢とのバランス調整(気剣体の一致した打撃)を学習することは極めて困難であり、かつ生徒が興味を喪失する原因となるものといえよう。本研究では分習学習によってこの点を解消できたものと考えられる。

以上が特に初期の出来栄えがよかった理由としてあげられる。初期、中期における出来栄えの評価が比較的良好にも拘らず、後期(10~20時限目)における指導は学習時間に比較して極々普通程度の出来栄えと言う評価であった。このように評価された最大の原因は「互角練習の取扱方に十分な工夫がみられなかつた」点である。表1によると7時限から12時限まで互角練習を取扱つてはいるものの配分時間はごく短時間である。一方、13時限からはかなりの時間を配分しているものの互角練習時の取扱方をVTRを再生し観賞してみたところ、いわゆる二人

一組による繰り返し練習のみである。このような学習は変化に乏しく、生徒の学習意欲を喪失、減退させるもので、更なる教材の研究と工夫が必要と考えられる。

注1 しっかりした基礎動作を作ってから応用動作……云々という意味は、一つ一つの技あるいは動作を正確に学習させた後、次のステップに進むという考え方である。

注2 技に習熟した学習者が定石として、通常用いる打突距離。

IV まとめ

高校生を対象に恵土らが示した剣道指導案を改案するとともに指導者を代えて指導してみた。その結果、初期、中期段階は比較的学习効果が得られたものの、後期段階では互角練習の取り扱い方に課題を残した。

引用・参考文献

- 1) 石井 久 剣道の学習指導に関する研究—技術指導の体系化について—。北海道教育大学紀要、2、pp 110—124、1965
- 2) 恵土孝吉ら 初心者指導における一足一刀の間合いからの打突について。武道学研究、3—1、p 40 1970
- 3) 恵土孝吉ら 剣道の初心者指導。武道学研究、5—1、p 5 1972
- 4) 恵土孝吉ら 運動技術の中核と学習指導のポイント「剣道」。体育科教育、33巻、pp131—133、1985
- 5) 恵土孝吉ら 正課剣道の指導。金沢大学教育学部教科教育研究、22、pp113—128、1986
- 6) 恵土孝吉 正課剣道授業と指導内容の精選—剣道らしい動作を習得させめために—。体育の科学、38—1、pp63—67、1988
- 7) 恵土孝吉ら 正課剣道における指導法の研究。金沢大学教育学部教科教育研究第26、pp229—238、1990
- 8) 恵土孝吉ら 剣道技における動きづくり。体育の科学、42—7、pp541—546、1992
- 9) 田中静雄 学校剣道の指導理念に関する研

究。武道学研究、1-1、1968

- 10) 巽 申直 剣道の学習指導。全国教育系学部
剣道連盟研究会編、不味堂、1987
- 11) 三橋 衛 生涯体育に通ずる武道指導をもと
めて。千葉県立船橋高等学校 平成2・3・4
年度 文部省指定武道推進校
- 12) 文部省 学校剣道の手引き。大蔵省印刷局、
1993
- 13) 渡辺 香 剣道の技術指導に関する理論的考
察。(2)、中部工業大学紀要、1983